



河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

# 教育を 読む

日本のプロ野球は昭和11年2月、日本職業野球連盟が発足しスタートした。そして最初の試合が同年同月9日に愛知県の鳴海球場で行われた、名古屋金鯱軍対巨人軍である。この試合は10対3で金鯱軍の勝ちであったが、筆者はこの時金鯱軍の主将を務め、中堅手で先頭バッターであった。筆者はその後、肩を痛めて審判に転向し、昭和12年から戦争をはさんで昭和37年まで3,000回を超す試合で審判を務めた大ベテランである。そのベテランがプロ野球史を回想する。回想の例を少しだけ紹介する。

延長28回の試合があった。昭和17年5月24日、後楽園球場で行われた名古屋対大洋戦である。試合は、結局4対4の引き分けに終わった。この試合に筆者は審判を務めている。このときの投手は名古屋が西沢道夫、大洋が野口二郎であり、西沢が311



## 『プロ野球審判の眼』

島 秀之助 著  
岩波新書  
定価 700 円+税

球、野口が344球投げている。なんとタフであったことよ。

両人とも後に打者として活躍し、西沢は戦後の昭和24年度に37本塁打を記録し、野口は終戦直後の昭和21年に31試合連続安打の日本記録(当時)を樹立している。そういえば巨人軍のホームラン王 川上哲治、最初は投手として入団したというじゃないか。

回想試合いまひとつ。

昭和34年6月25日の巨人対阪神戦である。天覧試合であった。巨人の長嶋茂雄選手がサヨナラホームランを打った試合だ。この時も筆者は主審を務めた。主審であったためキャッチャーの後ろに立つ。後ろにはバックネットがあり、その後ろに陛下がおられる。陛下に尻を向けるということがどうにも気になって、困ったそうだ。しかし恩賜の煙草を頂いたそうだ。

戦時中は野球人も勤労奉仕で尼崎の川西飛行機工場へ行った。そこで

はベーブルースやルーゲーリックを手玉にとった沢村栄治投手も働かされていたそう。戦時中の巨人軍の選手たちの写真も本誌には掲載されているが、戦闘帽をかぶり胸に漢字の「巨」の大きな布を付けているのが笑える。

戦時中は英語は敵性語なので、ストライクは「よし一本」三振は「よし一本それまで」アウトは「退け」。これも笑える。

昭和19年になると戦争は逼迫し、後楽園球場の二階席が高射砲陣地になり、外野はイモ畑になった。そして11月13日、日本野球報国会は「切迫する時局にかんがみて一時休止する」と声明を出す。

本書の第Ⅱ部は100問100答 こんなプレーの判定は？であり、「大飛球が鳥に当たる」「犬が打球をくわえて走る」などに真面目に答えている。

野球好きだけでなく、万人に一読をおすすめする。